

ローマ・カトリック教会第266代教皇フランシスコは、2019年11月に教皇としては38年ぶりに来日し、長崎・広島・東京の各地を訪れた。日本のカトリック信者は少数派であるが、教皇は若いときから日本に対する共感と愛着を抱いていたと述べている。教皇の共感と愛着は、1549年にフランシスコ・ザビエルによりキリスト教が伝来し、その後の苛烈なギリシタン弾圧によりおびただしい宣教師と信者が殉教した地であり、また、世界で唯一の被爆国である日本に対する深い想いからであると拝察される。

教皇は、国連において、いち早く核兵器禁止条約の批准に協力するように呼びかけ、地球温暖化と生態系保護のための警鐘を鳴らし、人類全体がそれを守る責任と義務があることを強調している。核兵器禁止条約については、日本が核の傘のもとにあることを十分承知の上で、「核兵器の使用も所有も倫理に反する」と誰を

平和の巡礼者 教皇フランシスコ



もはばかることなく宣言している。東日本大震災被災者との会見の後、帰途の特別機の中で、さらに踏み込んで原発利用についても「完全な安全が保証されるまでは利用すべきでない」と警告している。

世界で最も小さな独立国バチカンの、軍備も工場も持たない一国の指導者が、世界の貧困と難民と飢餓の原因の多くは、持てる国の利益と紛争によるものであり、壁ではなく橋を懸けるようにと世界の良心に訴えている。今回、教皇が日本に示したのは、長崎の原爆で亡くなった弟を背負って焼き場の順番を待つて立つ少年の写真であった。それは戦争がもたらしたものを何よりも雄弁に語っている。教皇はこれを世界中のカトリック信者に配付するよう指示し、国の為政者にも正義と平和の必要性を訴えている。

ここでカトリック教会と本学園との係わりについて、少し触れたいと思う。聖カタリナ学園の経営母体である聖ドミニ

コ宣教修道女会は、800年の歴史を持つ聖ドミニコ修道会にそのルーツをもっている。聖カタリナは14世紀のイタリア・シエナに生まれ、同じドミニコ会第3会に属し、若い頃から町の貧者と病者のために奉仕していた。カタリナが生きていた時代のカトリック教会は王権の支配下であり、歴代の教皇はローマを去り、長年にわたって風光明媚なフランス・アヴィニオンに居を定め、教皇座は奢侈な社交の場となっていた。カタリナは教会の現状を憂い、当時の教皇グレゴリウス11世に面会し、ローマ帰還を強く訴えた。その結果、1376年、教皇はキリストの代理者として正統な教皇座に戻ることになった。カタリナはその後まもなく33歳で亡くなり、ローマバチカン大聖堂近くのドミニコ会の教会祭壇に眠っている。教会の危急存亡のときに尽力した聖カタリナを讃え、今もバチカンを守るように聖カタリナの像が建っている。

中田 婦美子 ● 学校法人聖カタリナ学園理事長

20世紀になり、再び来日したドミニコ会宣教師から譲渡された愛媛の地に、本修道女会がカトリック女学校を設立した。そこが学校法人聖カタリナ学園の発祥の地となったのである。

本学園は、この聖なる女性を学園の保護者として、彼女の教会に対する信仰と愛を建学の精神としているため、このたびの教皇の来日は、ドミニコ会における教会と聖カタリナの存在を身近に感じる恵みの機会となった。

筆者は、学園の一員として11月24日に長崎で開催された公式ミサに参加することができた。当日は激しい雷雨により会場の県営野球場には暗雲が立ち込めていたが、教皇が入場する13時30分、突如として青空があらわれ、太陽が輝きわたった。3万人の観衆は、この奇跡的な出来事に歓喜したのである。教皇は日本国民を祝福し、いのちを守る平和の巡礼者として日本の地に確かにその足跡を残された。